

総合看護学実習II（看護管理）で得られた看護学生の学び（原著）

その他の言語のタイトル	Learning acquired by intern nursing students (Nursing administration) Shiga University of Medical Science Hospital
著者	西尾 ゆかり, 太田 節子, 藤野 みつ子, 餅田 敬司, 穴尾 百合, 佐々木 あゆみ, 井下 照代
雑誌名	滋賀医科大学看護学ジャーナル
巻	5
号	1
ページ	58-63
発行年	2007-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10422/819

総合看護学実習Ⅱ（看護管理）で得られた看護学生の学び

西尾ゆかり¹ 太田節子¹ 藤野みつ子² 餅田敬司²

穴尾百合² 佐々木あゆみ² 井下照代²

¹滋賀医科大学医学部看護学科臨床看護学講座 ²滋賀医科大学附属病院

要旨

本研究の目的は、総合看護学実習Ⅱ（看護管理）における学生の学びを明らかにし、実習の意義を検討することである。本研究に協力を得た看護学生が記述したラベル 347 枚を対象とし、KJ 法で学生の学びを分類した。その結果、学生は【看護サービス管理過程】【管理者に必要な要素】【組織の機能】【他部門との連携】【病院経営】【調整】を表す 6 つの大カテゴリーと 23 の中カテゴリー、および 62 の小カテゴリーに分類され、各カテゴリー間の関連が明らかになった。今回の実習は、学生が専門職を目指すための方向性に影響を及ぼす意義があると考えられる。

キーワード：看護管理、老人看護学、学生の学び、実習の意義

I. はじめに

平成 6 年の「少子・高齢社会看護問題検討会報告書」を受け、平成 8 年には保健師・助産師・看護師法指定規則が改正された¹⁾。このカリキュラム改正により、老人看護学実習は 4 単位となった。S 大学医学部看護学科（以下、S 看護学科）では、この老人看護学実習 4 単位の内 1 単位を、総合看護学実習Ⅱとして、4 年次の看護学実習の最終段階（まとめ）として実施することになった。

一般に基礎や各論の看護学実習では、学生は、対象の個別性を尊重する看護過程を実施しており、医療施設の集団を対象とする看護管理実習をすることは少ない。しかし将来、学生が国内や国際社会で活躍していくためには、医療チームの一員としてのメンバースhipを学び、看護のリーダーシップの役割を理解することが必要である。

また、現在の日本における医療施設では、80 歳以上の高齢者数の入院割合が高く²⁾、加齢による感染や転倒転落、誤嚥等の環境調整を含めた看護管理を学習し、多様な看護の対象と家族の安全と安楽を保障し、看護専門職としてのモラルを高める管理の実際を学ぶことが大切と思われる。

そこで、今回、総合看護学実習Ⅱとして、個別看護を支える看護管理の必要性とその実際を学ばせたいと考え、看護管理実習を企画した。

本研究では、学生の学びとその構造を明らかにし、看護管理実習の意義を検討したい。

II. 研究目的

研究目的は、総合看護学実習Ⅱ（看護管理）にお

ける学生の学びを明らかにし、実習の意義を検討することである。

III. 実習の概要

1. 総合看護学実習Ⅱの概要

実習目標は、次の 5 項目である。

- 1) 看護管理の基礎となる組織管理、リーダーシップ等の諸理論を理解する。
- 2) 病院や病棟の組織とシステムを理解し、患者の満足度を高め、看護の質を維持・向上させるための看護管理の実際を見学する。
- 3) 医療における危機管理や、看護職としての倫理態度、看護職者の継続教育とストレス管理等、個別な看護過程を支援する看護管理の意義と重要性を学習する。
- 4) 看護管理者の看護観、管理に対する考え方や姿勢を理解し、組織の一員として参画するメンバースhipの役割を明確にする。
- 5) これまでの実習で学習した看護学を統合して自己の人的成長と看護観をまとめ、看護専門職として必要な今後の継続的な学習の方向性を明確にする。

2. 指導体制と実習方法

実習場所は、S 大学附属病院 2 2 カ所（看護管理部、1 3 病棟、手術室、ICU、放射線部、継続看護室、医療安全管理部感染コントロール）で、指導者は担当部署の看護管理者である。実習場所の配置は、事前に学生の希望を取り入れた。実習初日は、病院管理者による「病院管理」「看護管理」「病棟管理」「実習の調整」のテーマで、看護管理理論の特別講義を行い、翌日 2 日間を看護管理の見学実習とし

た。実習方法は、1名の看護管理者に2～3名の学生がついて、看護管理の実状を観察した。その後カンファレンスで、看護管理者から管理観・看護観を聴かせてもらった。2日目は、師長会を学生全員が見学した。最終日は、学内で、学生のグループカンファレンスを行い、実習の学びを共有するように指導した。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

研究デザインは質的帰納的研究方法を用いた。

2. 用語の操作定義

総合看護学Ⅱ：学生が学んだ基礎看護学実習および領域別看護学実習を基盤として、総合的に自己の学びを総括する。

看護管理：よりよい医療が行われ、快適な日常生活が保たれるためにまず方針を立て、計画し、その計画に従って管理を実践し、さらに評価、修正を反復し、常によりよい状態を整える一連の作業過程を看護管理³⁾とする。

学び：‘学ぶ’は、「教えを受ける、習う」⁴⁾という意味とする。

スタッフ：病棟や各部門におけるスタッフナースのことを意味する。

3. 対象

2006年7月に総合看護学実習Ⅱを終了した4年生59名のうち、本調査に協力を得た学生の学びを記述したカードを対象とする。

4. 倫理的配慮

学生には、口頭および文章にて研究目的、方法、研究協力は任意であること、研究協りに拒否しても不利益は全く受けないことを説明し、学生を特定できないように無記名にした。また、データは研究以外に使用せず、研究終了後は処理することを説明して承諾を得た。

5. データ収集

実習最終日の学内でのグループカンファレンス時に、学生に1枚のカードに「看護管理について学んだこと・思ったこと・考えたこと」を1文1意味で記述すること、学生1名につき、分類可能と思われるカード6枚を挙げてもらった。

6. 分析方法

分析はKJ法の手法を用いる。研究者間で学生が記述したカード（以下、ラベルとする）を精読し、その学びをグループ編成する。編成されたグループをカテゴリとし、それらに表札をつける。さらに、

カテゴリの意味内容を研究目的に照らして分類し、学生の学びを構造化する。

V. 結果

1. 看護管理における学生の学び

学生が記述したラベルは総数354枚であったが、研究目的に沿って精読した結果、7枚は目的にそぐわなかったため除去し、有効ラベルは347枚となった。以下、【 】は大カテゴリ、《 》は中カテゴリ、< >は小カテゴリを示す。ラベルをグループ編成したところ、小カテゴリは62、さらに中カテゴリが23と編成された。大カテゴリは、枚数の多い順に、【看護サービス管理過程(47.3%)】【管理者に必要な要素(20.2%)】【組織の機能(12.7%)】【他部門との連携(10.7%)】【病院経営(6.6%)】【調整(2.6%)】の6カテゴリに編成された(表1)。

2. 看護管理におけるカテゴリ分類について

学生の学びとして取り出された6つの大カテゴリには、次の中カテゴリと小カテゴリが認められた。

【①看護サービス管理過程】には、枚数の多い順に、《スタッフの指示・統制》《スタッフの動機付け》《管理サービス目標》《患者把握》《スタッフの組織化》《スタッフ把握》《看護管理組織の成立》《管理日誌の活用》《委員会活動》の9つが見られ、

【②管理者に必要な要素】では、《行動力》《判断・分析力》《資質》《倫理的態度》《看護観》《理論》の6つが、【③組織の機能】では、《人・物・情報・時間の管理》《病棟管理》の2つであった。【④他部門との連携】では、《他職種との交渉・調整》《人間関係の調整》《外来との連携》の3つ、【⑤病院経営】では、《経営参画》《経営目標》の2つであった。【⑥調整】は、《調整》のみであった。

3. 各カテゴリの関連と学びの構造化

学生の学びのカテゴリ間の関連性については、図1のように構造化された。

看護管理者は、看護サービス対象の《患者把握》と提供者の《スタッフ把握》をし、<常に課題を持ち改善していこうとする姿勢>で、<患者の安全安楽とその看護サービス>を優先する《看護管理サービス目標》を設定していた。そして、その目標達成のために、看護部長をトップとした《看護管理組織》を成立させ、そのプロセスとして、《スタッフの組織化》を行うという関連があった。次に、看護管理者は<スタッフの精神面>を含めた<スタッフの

表1. 総合看護学実習Ⅱ（看護管理）で得られた看護学生の学びの分類

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	レベル数
看護サービス管理過程 164枚(47.3%)	スタッフの指示・統制	スタッフすべての教育・指導を行う	23
		情報をスタッフ全員で共有する(報告・連絡・相談)	14
		リーダーシップでスタッフの方向性を決める	7
		スタッフに役割を委ねる	4
		業務のスリム化を行う	4
	スタッフの動機付け	スタッフが働きやすい環境を作る	21
		スタッフの精神面を把握しサポートする	10
		スタッフの健康管理を行う	4
		スタッフを大切にすること	4
		スタッフの自主性を尊重しボトムアップする	3
		スタッフとの信頼関係を持つ	3
		スタッフの相談を受ける	3
		スタッフを見守りサポートする	1
	管理サービス目標	患者の安全安楽と看護サービスを一番に考える	11
		目標管理を行っている	8
		常に課題を持ち改善していこうとする姿勢を持っている	6
	患者把握	患者の状況把握を行う	9
		病棟の把握を行う	6
		ナースや患者の把握をするために巡回を行う	3
	スタッフの組織化	スタッフの能力・負担軽減と患者の安全を考えて勤務表を作る	9
スタッフ把握	スタッフ一人一人の能力や性格を把握する	5	
	患者・スタッフすべての人を知る	2	
看護管理組織の成立	看護管理組織の成立	2	
管理日誌の活用	管理日誌を使用している	1	
委員会活動	委員会などの活動を行う	1	
管理者に必要な要素 70枚(20.2%)	行動力	危機管理能力を持っている	9
		コミュニケーション能力が必要である	6
		看護モデルとなるようにふるまう	2
		人を動かす力を持っている	1
		行動力がある	1
		幅広い能力を持っている	1
		判断・分析力	様々なことを観察・把握・判断する力を持っている
	データ分析と説得する力を持っている	8	
	スタッフの能力評価をする力がある	2	
	資質	広い視野を持っている	4
		様々な知識を持っている	3
		発想力・創造力を持っている	3
		先を見通す力を持っている	2
		師長のカラーが病棟に反映されている	2
自らのビジョンを形にしている	1		
倫理的態度	状況に合わせて対応していくことが必要	4	
	公平性を保つことが必要	4	
	一貫した態度を示すことが必要	2	
看護観	自分の看護観を持っている	6	
理論	管理に必要な理論	1	
組織の機能 44枚(12.7%)	人・物・情報・時間の管理	業務・安全・経営を考えた上で物品管理を行う	24
		人・物・情報・時間の管理を行う	5
		適切な資源・情報を把握し活用する	3
		すべての人の管理を行う	2
	病棟管理	ベッドコントロールを行う	5
特性をふまえて病棟の調整を行う	5		
他部門との連携 27枚(7.8%)	他職種との交渉・調整	他職種との連絡・調整を行う	18
		他職種・組織との交渉をする	6
外来との連携	外来との連携をとる	3	
病院経営 23枚(6.6%)	経営参画	組織全体で管理していくように働きかけている	10
		経営について把握している	8
		人材確保を考えている	3
	病院全体の運営も行う	1	
経営目標	将来の病院のあり方を考えている	1	
調整 19枚(5.5%)	調整	人間関係を調整する	10
		トラブル・クレームの対処・報告・相談を行う	9
合計			347

健康管理を行う>やくスタッフとの信頼関係を持つ>ように対人関係をつくり、この関係を維持するために<スタッフの相談を受ける><スタッフを見守りサポートする><スタッフの自主性を尊重しボトムアップする>、<スタッフが働きやすい環境を作る>等の実践をし、《スタッフの動機付け》と関連していた。さらに、目標や組織を機能させるために、<スタッフに役割を委ねる>やくスタッフすべての教育・指導を行う>とする管理者役割があった。また、看護管理者は<情報をスタッフ全員で共有>するための報告・連絡・相談をし、<業務のスリム化を行う>、<リーダーシップでスタッフの方向性を決める>等《スタッフの指示・統制》という役割を有する。これらの関連は、看護サービス提供のためのプロセス、つまり【看護サービス管理過程】として循環していた。また、その過程の中で、情報収集としての《管理日誌の活用》や《看護管理組織の成立》に必要な《委員会活動》を看護管理者が行うという関連があった。

看護管理者は<様々な知識>やく<広い視野>、<先を見通す力>と<発想力・創造力>を兼ね備え、<師長のカラーが病棟に反映する>ことやく<自らのビジョンを形にする>等、リーダーとしての《資質》をベースに、<観察・把握・判断する力>と<データ分析と説得力>やく<スタッフの能力評価>という《判断・分析力》の能力を持っていることが明らかとなった。そのため、看護管理者には<コミュニケーション能力が必要>で<人を動かす力><危機管理能力>等の<幅広い能力>や、自らが<看護モデルとなる>《行動力》を持ち、リーダーシップを果たしているという構造が認められた。さらに、看護管理者は<状況に合わせた対応>と、スタッフへの<公平性を保つ>やく<一貫した態度を示す>という《倫理的態度》が必要であり、《看護観》や《理論》とともに《判断・分析力》に関連していく。これら【管理者に必要な要素】は【看護サービス管理過程】に影響を及ぼすという関連が認められた。

看護管理者は、《人・物・情報・時間の管理》やく<ベッドコントロール>、<病棟の調整>といった《病棟管理》を行い、病院【組織の機能】を果たす役割を担っている。その【組織の機能】を果たすためには、《他職種との交渉・調整》、《外来との連携》という【他部門との連携】や【看護サービス管理過程】からの影響が関連していることが認められた。そして【組織の機能】には、《トラブル・クレームの相談・対処・報告》や病院内のすべての《人

間関係の調整》といった医療安全確保のための【調整】を行うという関連も認められた。

【病院経営】では、看護管理者が《経営目標》を設定し、<経営について把握>し、<組織全体で管理>という《経営参画》を行う関係が認められた。また、この【病院経営】には、病院各々の【組織の機能】と【看護サービス管理過程】が相互に影響する構造が認められた。

Ⅶ. 考察

以上の結果から、学生の看護管理実習における実習の意義について考察する。

1. 集団の患者を支える看護管理過程

最も多い学生の学びは、【看護サービス管理過程】であった。これは、看護サービスを患者へ直接提供する場である病棟やICUなどの担当部署の看護管理者から多くの学生が指導を受けたためと思われる。《患者把握》《スタッフ把握》による情報収集から、《目標》設定・計画立案、《組織化》、《動機付け》といったプロセスが看護管理の学びとして得られていた。これは、看護過程を支える、集団を対象にした看護管理過程の実状を体験できたという意義があったと思われる。

2. ロールモデルとしての看護管理者の姿

次に多かった学生の学びは、【管理者に必要な要素】であった。2日間、看護管理者の業務や技術・態度などの観察をし、また看護管理者の考え方や看護観を聴取することで、看護管理者にはさまざまな能力や知識、リーダーシップが必要であることを学んだと思われる。看護学実習において学生の学習活動を説明する概念の1つである“模範の発見と同一化”⁵⁾を学生が学んだことだと考えられる。ロールモデルは学生が専門的態度を習得するために有効であり、その学習効果には永続性がある⁵⁾といわれている。今後、学生が看護専門職としての継続的な学習をしていく方向性に影響を及ぼす意義があるのではないかと考える。

3. 病院経営・組織機能・他部門との連携・調整への気づき

ラベル数は少ないが、看護管理部と師長会を見学することで、【病院経営】や【組織の機能】、【他部門との連携】、【調整】といったラベルがあった。これは、目に見えない看護管理の重要性に学生が気づいたという意義があったと思われる。そして、このような指導機会の少ない実習での学びを、最終日のグループカンファレンスによって共有し、さらに広い

視野で学びを得られるようにした指導方法は重要であったと考えられる。

他の文献⁶⁾との比較において、本研究では、見学実習が短期間にも関わらず、学生が看護管理の意義や重要性を学ぶことができ、看護管理実習の目標が達成できたものと考えられる。また、この実習は、学生が目指す看護専門職の方向性を示唆する意義があると思われる。

VIII. まとめ

本研究は、総合看護学実習Ⅱ（看護管理）における学生の学びを明らかにし、実習の意義を検討することを目的とした。研究に同意を得られた 59 名の学生のラベル 347 枚を分析した結果、以下のことが明らかになった。

1. 学生の学びは、【看護サービス管理過程】【管理者に必要な要素】【組織の機能】【他部門との連携】【病院経営】【調整】の6カテゴリーであった。
2. 学生は講義と見学実習により、看護管理の意義と重要性を学んだ実習であった。

謝辞

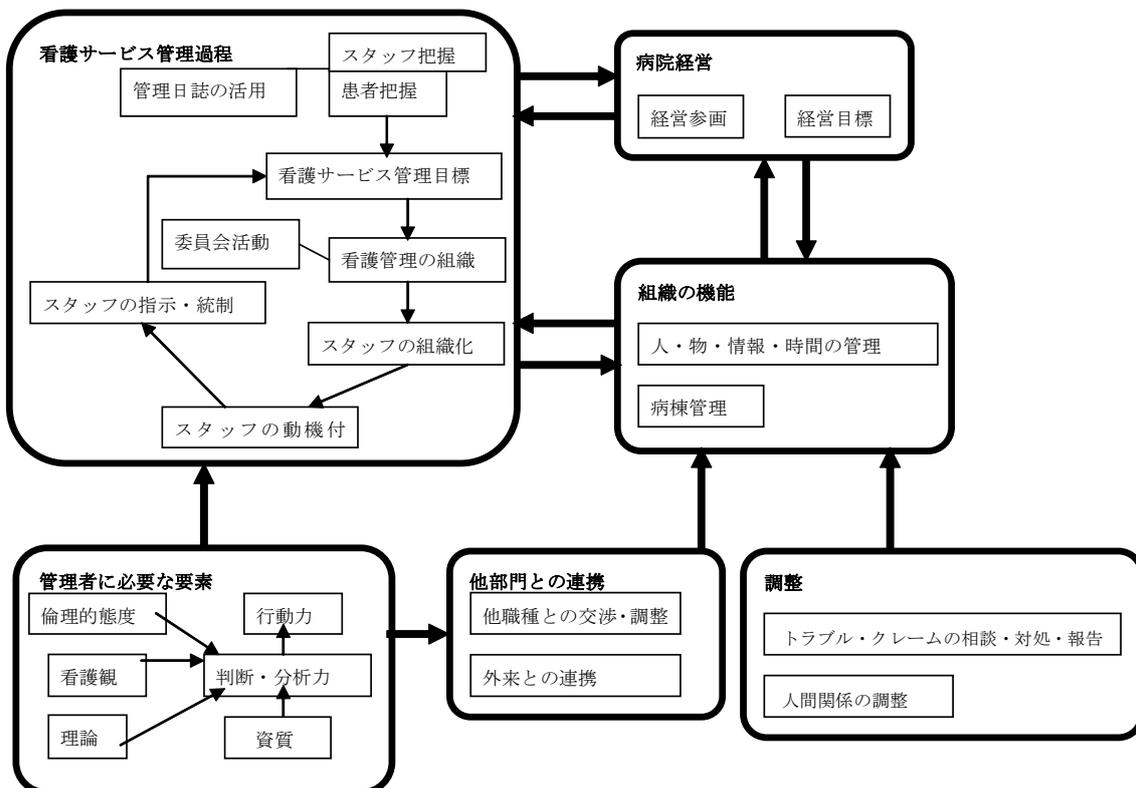
本研究にあたり、調査にご協力してくださいまし

た学生の方々に厚くお礼申し上げます。

文献

- 1) 杉森みど里, 舟島なをみ: 看護教育学. 91, 医学書院, 2004.
- 2) 厚生統計協会: 国民衛生の動向・厚生指標. 臨時増刊 53 (9), 72-73, 厚生統計協会, 2006
- 3) 看護学大辞典 第4版. 341, メヂカルフレンド社, 1997.
- 4) 新村出編: 広辞苑 第5版. 2522, 岩波書店, 東京, 1998.
- 5) 全掲書 1). 260-264.
- 6) 戸井間充子, 藤本照代他: 看護管理体験実習における看護管理の学び—学生レポートの分析より—. 日本看護学会論文集, 看護管理, 34, 324-326, 2003.
- 7) 井部俊子, 中西睦子: 看護管理概説—21世紀の看護サービスを創る—. 日本看護協会出版社, 2005.
- 8) 井部俊子, 中西睦子: 看護マネジメント論. 日本看護協会出版社, 2004.

図1. 学生の学びの関連図



Learning Acquired by Intern Nursing Students (Nursing Administration)

Shiga University of Medical Science Hospital

Yukari Nishio¹, Setsuko Ohta¹

Mitsuko Fujino², Takashi Motida², Yuri Anao², Ayumi Sasaki², Teruyo Inoshita²

¹Shiga University of Medical Science Faculty of Nursing

²Shiga University of Medical Science Hospital

Abstract

This study examines the significance of the learning experience during the student nurse practicum II (nursing administration), and identifies the knowledge acquired by intern nursing students. Fifty-nine nursing students who consented to participate in this study generated 347 labels to describe their learning experiences. These labels were analyzed using the KJ method.

The labels were classified into six primary categories of learning experience: nursing service administration processes, essential factors for administrators, organizational function, cooperation with other departments, hospital management, and coordination. In addition, 23 secondary categories and 62 tertiary categories were determined. A relationship between each category was identified.

The results suggest that this practicum was successful in achieving its purpose of providing students with knowledge of nursing administration that helped them to determine the appropriate direction of their nursing career.

Keywords: nursing administration, gerontological nursing, student learning, significance of practicum